

サラセン文化とネストリウス派

大 館 宗 憲

一

ヘレニズム文明の雰圍氣中に生じた基督教はローマ帝國に於て公認され、やがてその政治組織にならひ教會制度を確立し隆盛となつた。一方ギリシヤ哲學を取り入れ教理を深めたが、後にはその爲に教父連の論争を醸成しニケーヤの宗教會議(325 A. D.)によつて一時は鎮まり正教の樹立となつた。然しギリシヤ文化の陰影の濃き東方の基督教界にては依然として教理の哲學的研究熾烈を極め、幾多の異端の簇生を見た。此等の異端説を奉ずる信者達はローマ帝國及正統教會から迫害又は放逐され、その結果、多くは帝國領土外に自由の天地を求めた。勿論中には帝國内にあつて帝國を苦めたものも少くない。ネストリウス派・一性論派(Monophysites)等は此の時正教より分離した派である。正教はそれ自身後世歐洲に於

て各方面に貢献した事は言を俟たないが、異端派といへども狭い範圍ながら世界史上に印した業績は少くない。今述べんとするネストリウス派もその一たる事を認めた

二

シリアのゲルマニキヤ(Germanica)出身でアンチオキヤの律僧ネストリウスは、四二八年コンスタンチノーブルの長老となりテオドシウス二世に説いて熱心に異端排斥に努力した。然し彼の神母説(Theotokos)はアレクサンドリアのキリル(1)(Cyril)の反對する所となり、四三一年エフェスス(Ephesus)の宗教會議で異端の宣言を受け、その教義は禁ぜられ著作は焼かれ、彼及その一派は放逐された。ネストリウスはアラビアのペトラ(Petra)、後に更にリビヤ沙漠中に逐はれた。此のネストリウスの説を奉

じた一派が所謂ネストリウス派で彼等は逃れて東方シリア方面のシリア語を使用せる基督教徒社會に入り來り信者を得た。同時代のエデッサの僧正イバス (Ibas 436-517 A. D.) はネストリウスに左袒して二度まで誹難されたが、事なくして死するまで在職して當地でネストリウスの教儀を説いた。故にエデッサはネストリウス派の大本營たるかの觀があつた。四五七年イバスの死後帝國の壓迫を受けネストリウス派の人々はイバスの弟子バルサウマ (Barsauma) に率られ波斯領に入りセレウキヤ (Seleucia) の長老 (Catholikos) に迎へられ、その長老の紹介で波斯王ピロス (Phros) の保護を受け、ネストリウス派はゾロアスター教徒の反對にも拘はらず、公許され種々の特權さへ付與された。是波斯王が政治上の仇敵なるビザンツに對する政治的意趣を以てネストリウス派を助けたと思はれる。かくて彼等は一方反ビザンツ思想に驅られ、他方波斯王の恩顧に酬いる爲、波斯の風習に適する様に教儀を改め東方的色彩を多量に帯びる事となつた。日用の言語も正教々會より分裂しシリア語の世界に入るに及んでギ

リシア語のかはりにシリア語(アラマイ語)を用ひ、波斯に移住した後もシリア語を用ひた。

ネストリウス派の人々は熱心に布教に従事しつゝ又ギリシア文明の東方傳播の大事業を知らず／＼の中に行つた。彼等は基督の人格について自派の説明に努力しギリシア哲學の所説、用語を引用した。アリストテレスの論理學新プラトン派の哲學は當時の神學上の術語、反駁論の源泉と言ふべき者であつた。故にネストリウス派は帝國教會より分離してシリア語世界に入ると盛に翻譯に従つた。彼等は獨創的の所は少なかつたがギリシアの原典を忠實にシリア語に譯出した。哲學神學方面のみにあらずして醫學・化學・天文・博物等ギリシアの諸科學にわたる著作も亦翻譯した。波斯領内に學校が開かれ、ネストリウス派の人々は熱心に此等の學問の教授翻譯に身を委ねた。ネストリウス派の學校中最古最大なのはニシビス (Nisibis) の學校で三二〇年頃開かれて神學の研究所であつた。三六三年波斯がニシビスを得た時は閉ぢられてゐたがネストリウス派分裂後再開されたものである。五五

○年ゾロアスター教よりの改宗者でネストリウス派となつたマール・アーバ(Mar Abba)はセレウキヤに學校を建てた。波斯王クスラウ・アヌシルワン(Kusraw Anushirvan 531-578 A. D.)はクージスタン(Khuzistan)のジュンデシヤブール(Junde-Shapur)にゾロアスター教の學校を開校した。此處で哲學・神學・醫學其の他の學問の研究が盛となつた。⁽⁵⁾醫學はギリシア(アレクサンドリア)の醫學は勿論印度のそれまで教へられ原典の翻譯も亦行はれた。有名な教師はネストリウス派の僧侶であつて、波斯の宮廷で侍醫として高名を馳せた醫家も多くは彼等ネストリウス派の面々である。かやうにネストリウス派のペルシヤ領内の活動は隣接せるアラビアに何等の影響を與へずにはおかなかつた。又宣教に熱心な僧侶達が等閑に付した筈もなかつたのである。

三

古來全く世界の文化圏外に存したかの如く思惟されてゐたアラビアも決して別天地といふわけではなかつた。地勢上比較的孤立の地位にあつた事は事實であるが古く

埃及・メソポタミヤとの交渉があつた事は史上に明かである。基督教の傳道も基督教の擴大弘通と共にアラビアに及んだ。此の傳道は三方面よりアラビアに浸透したといはれてゐる、即ち西北シリア・西南アビシニアよりイエーメン・東北メソポタミヤ・此の三方面よりと稱せられる。而も正教にあらすして帝國教會より異端視された諸派の形でアラビア人は基督教に接したのである。シリア・アビシニア方面は主として一性論派(Monophysites)であり、メソポタミヤ方面はネストリウス派であつて此の二派はアラビア人に基督教思想を知らせ後世のサラセン文化の素地を築くに働いた最も大きな要素であつた。その中でネストリウス派は前述の如く波斯王の保護を受け熱心に布教に従ひニシビス・セレウキヤよりメソポタミヤ地方一體に弘通しヒラ地方では最も盛であつた。アラビア人の國であり、波斯の勢力の及んでゐる此のセラは早くから基督教のアラビアへの入口となり程度こそは不明であるが、相當にネストリウス派は盛であつてヒラ教會さへ建立された。彼等は更に貿易路に沿ふて南方ナジ

ラーン (Nairan) まで布教を行ふた。イブン・ヒシャム (Ibn Hisham) によれば一シリアの僧フアイミユン (Faymīyūn, Phemon) がナジラーン教會を創建したといふてゐる。⁽⁷⁾ ナジラーンは當時定住農民としてのアラビア人の中心であり商工業の核心の一つでもあつた。又北方からのネストリウス派、西北方及アビシニアからの一性論派の布教が行はれて基督教の中心ともなつた。アビシニアがイエメン地方を統治してゐたときユダヤ教の改宗者ドウ・ヌワース (Dhu Nuwas) は土民と共に叛亂を企て、ナジラーンの基督教徒を迫害した (634 A. D.)。ユダヤ教に改宗するか又はイエス・クリストを單に一個の人間なりとの説を認むれば助命せんと言ふてゐる。是によるとネストリウス派のものがドウ・ヌワースを支持してゐたと言ふ事が察せられ、従つてネストリウス派の布教が當地まで達してゐた事が暗示される。彼等はかくて漂泊民から定住民までその傳道を及ぼしてゐたと思はれる。ムハンマッドがイスラームを開教する以前、すでにネストリウス派其他の派の布教によりアラビア全土には基督教的思想

が充分培はれてゐたのである。

傳説によれば、若きムハンマッドはシリア訪問の際バヒラ (Bahira) 又はネストル (Nestor) といふ基督教隱者に豫言者の相ありといはれたと。その人はネストリウス派の僧ともいふ。⁽⁹⁾ 是はネストリウス派の宣教師と彼豫言者の接觸のあつた事を示す。少くともアラビアに於てネストリウス派の隱遁者の姿は見なれた有様なる事を意味してゐる。この隱者の事は初期イスラーム以前のアラビア人の詩篇及クラーンに散見する所である。かやうな空氣の間にあつてムハンマッドは彼自身の教を組織し傳道した。彼のアルラーフより啓示されたと稱するクラーンを見れば基督教・ユダヤ教の影響を受けた事の多大なのは明白である。然し何處の個所を基督教より又ユダヤ教より採り入れたかを知る事は甚だ困難である。又同じ基督教中いづれの派の影響を多分に受け入れたかも判然しない。この環境のネストリウス派一性論者の派別も始は知らなかつた。彼ムハンマッドは無學であつたから基督教の諸書を読んだのでなく基督教徒からの口傳が基督教に

對する彼の智識の全體であつたと言ひうる。故にその智識の不完全な事及基督教各派の説が彼に於て混同された事は止むを得ない事であらう。即ち當時アラビア化されてゐる基督教思想が彼に作用したと見るが至當と思はれる。

四

ムハンマッドは彼の傳教の始には基督教に好意を持ちその教徒からかなり學ぶ所が多かつたが、いよゝゝ眞に自己の宗教を徹底せんとするに至つて偶像崇拜者やユダヤ教徒と同様に迫害を加へた。所謂メッカ時代よりメダイナ時代には迫害甚しく遂に聖戰を宣言するに至つた。然し妥協して納貢を約して舊の宗教保持を許した事もあつた。サラセンの領土擴大征服の際には基督教徒は人頭税(Jizya, Jazyā)及地租(Kharaj, Khraj)の二重の負擔を負へば己の宗教の保持を許され生命・財産の保證を得た。メソポタミヤ・波斯・埃及の諸市町村の降伏條件を見れば是を知る事を得る。後世には各々税額も決定された。勿論時代々々の爲政者の取締に對する緩急の程度(10)の

相異はあつた。正統カリフの後のウマヤ朝 (Umayyads) のカリフ達は宗教的首長といふより俗的君主・アラビアの君主であつたから寛大であつてダマスクス (Damascus) の宮廷に基督教徒は自由に出入し得た。アツバス朝 (Abbasides) がバグダード (Baghdad) に君臨するに及び漸次基督教徒に壓迫が加へられた。アツバス朝のカリフでも基督教徒の醫者を用ひ學術獎勵をなした。かやうにイスラーム世界に於て基督教徒は待遇されたので彼等は自己の宗教を信じ教理を究め諸學に没頭する事を得、その智識をアラビア人に傳へ普及せしむるにシリヤ譯されたギリシアの原典のアラビア譯に従ふに至つた。遂にカリフの保護の許に活動するに至り、ネストリウス派・一性論派の僧侶達は今まで使用してゐたシリア語の諸書を更にアラビア語に翻譯する事となつた。こゝにシリア世界を経てギリシアの諸學問はアラビヤ人に忠實に提供される事になりアラビヤ人中にもギリシアの諸學の門を訪れるものが輩出した。言を換へていへばアラビヤ人はネストリウス派・一性論派の手を経てヘレニズム文明と握手する

を得たのである。故に此等の基督教徒はヘレニズム文明をアラビアに紹介し後のサラセン文明の基礎を置いた恩人である。

五

然らば彼等基督教徒は如何に活動したか。前述の如くネストリウス派・一性論派は熱心にギリシヤ原典のシリア譯に従つてゐた。ネストリウス派は波斯王の保護の内にあつて論理學・神學等の著者を著はし、アリストテレスの論理學・形而上學の研究をなし併せて醫學上・科學上の智を磨くものが續出した。サラセンの侵入になつても此の風潮はシリア語世界では決して衰へず却つて盛となつた。然しイスラーム世界が哲學的科學的研究に興味を覺ゆるに至つたのはアッバス朝の興起頃であり、此頃から今までのシリア語に譯されてあつたギリシヤの諸書がアラビア語に譯出され始めた。茲にイスラーム世界に於て諸書の翻譯時代を現出する事となつた。此の時代を大別して二期に分ける。第一はアッバス朝の興起からアル・マムーン(al-Mamun)の即位まで(A. H. 132—198=749

—813 A. D.) 第二はアル・マムーン及其の後繼者の時代である。前期には基督教徒・ユダヤ教徒が大部分を占め、後期には此等の人々にモスレムも加はりバグダードにて各方面の研究が行はれた。醫學方面は最も熱心でありルクレルク(Dr. Leclerc)の列擧した所によれば十世紀(西紀)の有名な醫師三十六名中、基督教徒は二十九名を數へてゐる。ネストリウス派のもので此の後カリフの保護を受けて大名をなしたのも少くなかつた。

カリフのアル・マンスール(al-Mansur)は回教曆一四八年(755 A. D.)にバグダードを創建した後にネストリウス派の醫家ジョージ・ボクチツシュ(George Boktishu)をジュンデシャプールの學校より召喚し侍醫となした。カリフは此の年重病に悩まされたがジョージによつて全快した。ジョージはカリフの信用を博しネストリウス派の醫家はカリフ宮廷に永久的の地位を占め、バグダードの醫學校を作るに至つた。ジョージの二子ジョージ・ガブリエルは、共にハルン・アル・ラシッドの侍醫として名高く、殊にガブリエルは、論理學序論・ギリシヤの醫家、ディ

オスコールス (Dioscorus) ガレヌス (Galenus) 等の著書に基つて醫學便覽・醫學全書等を著はした、かくアル・マンストールはネストリウス派の醫家達をバグダードに招き保護を加へたばかりでなくギリシア・シリア・ペルシアの著書アラビア語に譯せしめ、且獎勵した文化の大恩人であつた(更に熱心なカリフはアル・マムーン (al-Ma'mun) であつて回教曆二一七年(832 A. D.)にバグダードに學校を建て圖書館・天文觀測所をも其處に設け バイト・アル・ヒクマ (Bayt al-Hikma) と命名し) ヤーファ・イブン・マサウアイン (Yahya b. Masawaih + A. H. 243) をして管理せしめた。そうして諸科學の研究・翻譯を奨め、アル・マンスールによつて發展した文運は彼マムーンに至つて最高潮に達した。此のバイト・アル・ヒクマの學校の最も重大な事業はヤーファの弟子及後繼者によつて成就された。その中で有名なのはアブー・ザイド・フナイン (Abu Zayd Hunayn b. Ishaq al-Ibadi + 263A. H. = A. D. 876) である。彼はネストリウス派の醫家でバグダード・アレクサンドリヤ等⁽¹⁸⁾で學び多種の醫書及びアリストテレスの

論理學書 (Organon) をシリア語・アラビア語に譯出した。彼の子イシハク (Ishaq) 甥のフバイシユ (Hubaysh) も亦翻譯者として活躍し盛に翻譯に従事した。アリストテレスの形而上學 (Metaphysica) 、「範疇論 (Categoriae) 靈魂論 (De anima) 」、「論理學書 (Organon) 等をはじめ博物・天文等に至る諸書、ユークリッド・アルキメデス或はガレヌス・ヒッポクラテス (Hippocrates) 等の著作はシリア語アラビヤ譯をなされた中の主なものである。同時にシリア語世界に於てギリシア學問の註釋者の諸書も大に熱心に譯された。

回教曆四世紀(西紀十世紀)はアラビアに於ける翻譯者の黄金時代であつた。そうして主としてシリア語を話す基督教徒によつて此仕事は行はれた。此の時代になればシリア語を経ずして直接ギリシア語より翻譯するに至つた。此の事業にはネストリウス派の人々のみが盡したのではなくジャコバイト派 (Jacobite) 即ち一性論派にも相當たる人は出た。又ハラン (Harān) の異教徒の中にも相當に従事したものがあつた。然しネストリウス派の人々が

最も傑出し數も多かつた。此等の翻譯者がヘレニズム文明の主要要素なるギリシアの諸科學のアラビア譯をなしてよりアラビア人の中にその文化を受け入れ研究し遂にはフアイラスーフ (Faiyasū) と呼ばれるギリシアの原典によつて研究する學者の一團を形成するものを生ずるに至つた。此の翻譯によつて得た智識をアラビア人は各方面に用ひ、⁽²⁰⁾ 彼等自身の獨創性を加へて茲に華やかなサラセン文明を編み出したのである。クラーンの解釋にアリストテレスや新プラトン派の説を容れてイスラム教理を整へると共に煩瑣哲學を釀成し醫學・天文・數學・鍊金術の異常の發達・進歩となつた。是即ちネストリウス派等のシリア語使用の基督教徒がヘレニズム文明をアラビアに移植培養した事に端を發してゐる。たとひアラビアに於て又イスラム世界に於て發展成熟する素地が存してゐるにせよ、此の文化的種子が蒔かれなかつたならばサラセンの文化は興り得なかつたかもしれない。

六

ネストリウス派は、實にかの基督教界がギリシヤ哲學

サラセン文化とネストリウス派 (大館)

の影響を受けその爲教儀に就て諸説の叢生した時の一産物であつた。基督の神性人性共有の説は正統派教會から異端とされ俗權の代表者ローマ帝國より迫害され、遂に帝國領土外に活路を見出した。かくて波斯・アラビア・印度へ傳教し更に中亞に及び七世紀には唐にまで弘通した (637 A.D.)。彼等は前述の如く教理探究説明に當り、ギリシア哲學の説及術語を用ふるを常とした爲ギリシア哲學殊にアリストテレス・新プラトン派の哲學を究め併せてギリシアの諸科學に曉通してゐた。此の事が彼等に幸しギリシア文化をあこがれてゐる波斯に於て大に歡迎された。此には他方波斯のビザンツ帝國に對する政治的敵對關係が大に含まれてゐる事が認められる。彼等は波斯に於て布教を許され、彼等の持つてゐた諸智識によつて益々信任を厚くしヘレニズム文明を波斯に宣傳する事となつた。此の形勢は波斯國境のアラビア國家のヒラに移された。アラビヤ人の基督教を知つたのは此のネストリウス派の形式に於てであつた。そうしてアラビアに一性論派と共に基督教思想を植附け、ムハンマツドのイスラム

運動に間接の影響を與へた。イスラームの發達領土擴大と共にアラビア人は近隣のヘレニズム文明に浴した諸國民に接しその文化を吸收するに至つた。イスラーム以前よりアラビア人に交はりギリシア文化の宣傳者たりしネストリウス派・一性論派の人々はアラビア人にギリシヤ文化を注入する代表者となつた。ネストリウス派の分離・東方宣教は茲にヘレニズム文明のアラビア流入といふ文化史上重要な契機となつた。但し注意すべき事はアラビアに傳へられイスラーム世界に擴がつたヘレニズム文明は地方的色彩を帯びてゐる事で是が又ネストリウス派の弱点である。ネストリウス派が帝國より追はれてシリア語世界に信ぜられギリシアの諸書をシリア語に譯して利用し布教した。シリア語世界の人々はかなり忠實にギリシア文明の翻譯移植に努力したが地方的即ちシリア的色彩を帯ぶるに至つた事は止むを得ない事である。

イスラーム時代になつてもネストリウス派等のこの文化的事業は續行されシリア語より更にアラビア語への翻譯となつた。サラセン帝國の確立と共にカリフの中には此

の文化的事業を支持し保護するものが出るに至つた。アル・マンスール、アル・マムーンなどはその例である。その翻譯事業に従事したものはシリア語を話す基督教徒であり、その中でもネストリウス派の人々が多數を占めてゐた。かくネストリウス派は他の一性論派と共にヘレニズム文明をシリア化し更にアラビヤに傳へ將來大に發展し爛熟したサラセン文明の基礎を置いたのである。是即ちネストリウス派のサラセン文化史上に残した大きな業績でなければならぬ。ネストリウス派はイスラームとヘレニズムをつなぐ鑲輪である。イスラーム世界に咲いたサラセン文化はやがて西歐に入つてルネッサンスの動機となつた。故にサラセンの文化も亦古代ギリシア文明とルネッサンスをつなぐ楔である。かく考ふればネストリウス派の世界の文化の上に印した足跡は偉大といはねばならぬ。(終)

註(1) E. Gibbon, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, vol. V, p. 132. (*The World Classics Series*)

(2) *ibid.* p. 142.

- (3) De Lacy O'leary, *Arabia before Muhammad*, p. 134—5.
- (4) De Lacy O'leary, *Arabic Thought and its Place in History* p. 41.
- (5) *ibid.* p. 42.
- (6) R. Bell, *The Origin of Islam in its Christian Environment* p. 17.
- (7) O'leary, *Arabia before Muhammad*, p. 137.
- (8) Bell, *The Origin*, p. 38.
- (9) O'leary, *Arabia before M.*, p. 141—2.
Muir, *The Life of Muhammad*, New & Revised ed. p. 21.
- (10) Bell, *The Origin*, p. 168—173.
- (11) Von Kremer, *Culturgesch. des Orients* *Khuda Bukhsh* trans. p. 67.
- (12) O'leary, *Arabic Thought*, p. 105.
- (13) *ibid.* p. 55.
- (14) *ibid.* p. 109—110.
- (15) *Khuda Bukhsh*, *Contribution to the H. of Islamic Civilization* p. 271.
- (16) O'leary, *Arabic Thought*, p. 110.
- (17) *ibid.* p. 112; Nicholson, *A Literary of the Arabs* p. 359. *Khuda Bukhsh*, *Contribution*, p. 273. 124

Harun al-Rashid の建設とその Mannun の方正

- (18) O'leary, *Arabic Thought*, p. 112—3.
- (19) *ibid.* p. 113.
- (20) *ibid.* p. 135.
- (21) *ibid.* p. 34.
- (22) O'leary, *Arabia before Muhammad*, p. 137.

(註終)